

1月のモロッコの政治情勢等を、当地報道を中心に以下のとおりまとめました。要人往来については末尾の一覧表をご覧ください。

なお、当政治月報は当月中にメディアで多く取り上げられた話題をその都度記録したもので、これらニュースについての当館及び日本政府の立場を何ら反映するものではありません。

【主な出来事】

- ◎（11～13日）伊達参議院議長の訪問
- ◎（16日）衆議院議長の選出
- ◎（30日）モロッコのAU加盟

<内政・政局・治安>

1 内政

（1）組閣協議の決裂

（ア）3日、公正と発展党（PJD）は、イスティクル党（PI）の次期政権参加を諦める趣旨を含意する声明を発表した。4日、ベンキラン首相はアハヌッシュ独立国民連合（RNI）党首に対し、現政権のPJD、RNI、人民運動党（MP）および進歩社会主義党（PPS）による連立政権を提案し、48時間以内に回答することを要請した。

（イ）8日、RNI、立憲同盟（UC）、MPおよび人民勢力社会主義同盟（USFP）は、より拡大された連立内閣を要求する共同声明を発出し、同日、ベンキラン首相も声明を通じて、UCおよびUSFPに対しては政権参加を要請していないと反発、RNIとの連立交渉を停止する旨表明した。

（2）国王主宰閣議の開催

10日、マラケシュにて、モハメッド6世国王主宰閣議が開催され、2000年7月11日にロメで署名されたAU制定法及び追加議定書を承認する法案が採択された。閣議ではまた、難民・移民の地位正規化オペレーション第2フェーズについても議論が行われ、モハメッド6世国王は、地位正規化の手續の加速化・簡易化などについて指示を与えた。

（3）衆議院議長の選出

（ア）14日から16日にかけて、PJDはPPS及びPIと協議を行い、統一候補を模索したが、候補者の擁立には至らず、PJDは候補者を擁立することなく、白票を投

じる旨のコミュニケを発表した。

(イ) 16日、衆議院本会議が開会され、ハビブ・エル・マルキ衆議院議員(USFP)が新議長に立候補、他党からの立候補はなく、唯一の立候補者となる。開会直後、PI所属議員(46議席保有)は投票に参加することを拒否し、議場を退出した。また、投票において、PJD(125議席)、PPS(12議席)が白票を投じたのに対し、USFP(20議席)に加え、PAM(102議席)、RNI(37議席)、UC(19議席)等がエル・マルキ候補に賛成票を投じた。

(ウ) 投票の結果、総投票数342票のうち、賛成198票、無効7票、白票137票で、ハビブ・エル・マルキ候補が新衆議院議長として選出された。

(エ) エル・マルキ新議長は1946年4月15日、ブジャアド(Bejaad。当国中部ベニ・メラル近郊)生まれ。経済学者であり、ラバト大学教授(経済学)。また、地中海研究グループ(GERM)会長及びモロッコ経済情勢センター会長を務める。1990年11月、ハッサン2世前国王により、青年・未来国家評議会事務総長に任命される。1992年11月からモロッコ王国アカデミー所属。1993年に衆議院議員(USFP)として初選出、以降衆議院議員を務める。1998年3月には農業・地方開発・漁業大臣として任命、2002年、国家教育・青少年大臣に任命。USFP国家執行委員会会長を務めるほか、USFP系新聞紙「Liberation」及び「Al Ittihad Al Ichtiraki」の出版局長を務める。

(4) 衆議院副議長・常設委員会委員長等の選出

17日、衆議院は以下のとおり同院執行部及び常設委員会委員長を選出した。

(ア) 衆議院執行部(エル・マルキ議長を除く。)

- 第1副議長：ラフセン・ダウディ(Lahcen Daoudi) 議員(PJD)
- 第2副議長：ラシッド・エル・アブディ(Rachid El Abdi) 議員(PAM)
- 第3副議長：モハメッド・ジュダル(Mohamed Jouadar) 議員(RNI-UC)
- 第4副議長：アブデルアヘド・アル・アンサリ(Abdelouahed Al Ansari) 議員(PI)
- 第5副議長：モハメッド・ウッジーヌ(Mohamed Ouzzine) 議員(MP)
- 第6副議長：ドリス・シュタイビ(Driss Chtaibi) 議員(USFP)
- 第7副議長：ネズハ・エル・ワフィ(Nezha El Ouafi) 議員(PJD) (女性)
- 第8副議長：ハイアット・ブフラシェン(Hayat Boufrachen) 議員(PAM) (女性)
- 財務官：ナジブ・ブリフ(Najib Boulif) 議員(PJD)
- 財務官：アブデラヒム・アトムン(Abderrahim Atomoun) 議員(PAM)
- 第1書記：アズハ・エル・アラク(Azzouha El Arrak) 議員(PJD) (女性)
- 第2書記：アスマエ・グラル(Asmae Ghlalou) 議員(RNI-UC) (女性)
- 第3書記：ブルーヌ・サレク(Bouloune Salek) 議員(PI)

(イ) 常設委員会

- 外交・国防・イスラム関係・在外モロッコ人委員会委員長：モハメッド・ヤティム (Mohamed Yatim) 議員 (PJD)
- 内務・自治体・都市政策委員会委員長：ザキア・ラムリニ (Zakia Lamrini) 議員 (PAM) (女性)
- 司法・法務・人権委員会委員長：アディル・アル・ビタル (Adil Al Bitar) 議員 (PAM)
- 財政・経済開発委員会委員長：イドリス・アザミ・アル・イドリシ (Idriss Azami Al-Idrissi) 議員 (PJD)
- 社会セクター委員会委員長：サイダ・アイト・ブアリ (Saida Ait Bouali) 議員 (PI) (女性)
- 生産セクター委員会委員長：サイド・シュバアトウ (Said Chbaatou) 議員 (RNI-UC)
- インフラ・エネルギー・鉱山・環境委員会委員長：サイド・タドラウイ (Said Tadlaoui) 議員 (MP)
- 教育・文化・コミュニケーション委員会委員長：モハメッド・メラル (Mohamed Mellal) 議員 (USFP)
- 公共財政管理委員会委員長：ドリス・スカリ・アダウイ (Driss Skali Adaoui) 議員 (PJD)

(ウ) 衆議院における各会派の長

- PJD議員会長：サアディ・ディン・エル・オトマニ (Saad Dine El Otmani) 議員
- PAM議員会長：アブデラティフ・ワハビ (Abdellatif Ouahbi) 議員
- RNI-UC議員会長：ラシッド・タルビ・アラミ (Rachid Talbi Alami) 議員
- PI議員会長：ノルディン・メディアンヌ (Noredine Mediane) 議員
- MP議員会長：モハメッド・ラアラジ (Mohamed Laaraj) 議員
- USFP議員会長：シャクラン・アマム (Chakrane Amam) 議員
- PPS議員会長：アイシャ・ラブラク (Aicha Lablak) 議員 (女性)

(5) 国会によるAU制定法の承認

(ア) 18日、衆議院外交・国防・イスラム関係・在外モロッコ人委員会は全会一致で、2000年7月11日にロメで署名されたAU制定法及び追加議定書を承認する法案第01-17号を採択した。同委員会での審議及び採択後、同院本会議が開催され、本会議においても同法案が採択された。外交委員会での採択後、メズアール外務・協力大臣は、モロッコのAU復帰は時間の問題であると述べた上で、「今日、モロッコがAUに再加盟する全ての条件が整った。モロッコはAUにおいてアフリカの行動と開発に貢献していく」と強調した。また、ヤティム衆議院外交・国防・イスラム関係・在外モロッコ人委員会委員長は、国家の利益が他の全ての考慮に優先されることから、全ての政

党及び議員グループはそれぞれの意見の対立を棚上げした旨述べた。

(イ) 19日夜、参議院本会議は全会一致でAU制定法及び追加議定書を承認する法案第01-17号を採択した。同日午前には同院外交国防委員会が全会一致で同法案を採択していた。委員会終了後、メズアール外務・協力大臣は、同法案の採択は、モロッコのAU復帰にかかる参議院の様々な政党からの支持を表している旨述べ、これを評価するとともに、全ての関係者が、モロッコがAUに復帰する時が来たと考えていると述べた。同大臣はまた、モロッコのアフリカ政策、モハメッド6世国王のアフリカ各国訪問、近年力を入れているモロッコ・アフリカ関係の多様化を通じて、全ての同院議員がモロッコにとってのアフリカの重要性とその責任を再認識していると述べた。

2 軍事

● モハメッド6世国王によるモロッコ王立軍総監の任命

17日、王宮声明によれば、モロッコ王立軍最高司令官兼総参謀長であるモハメッド6世国王は、カサブランカの王宮においてアブデルファタハ・ルアラク (Abdelfatah Louarak) 少将を引見し、同少将をモロッコ王立軍総監に任命した。モハメッド6世国王はまた、故ハッサン2世国王及びモハメッド6世国王に対するブシャイブ・アルーブ中将(前総監)の献身に謝意を表した。

3 治安

(1) テロを称賛する者の逮捕 (サフィ)

(ア) 14日、国家安全総局 (DGSN) は、2日、サフィにおいて法律の手続き及び措置の規定に従い、テロを称賛する者を逮捕したと発表した。

(イ) DGSNによれば、第三国で外国人大使が銃撃された後 (注: 2016年12月19日にトルコで発生した露大使射殺事件と思われる)、容疑者はSNSの自身のアカウント上に、テロリストの行為及び計画を称賛する内容のコメントを掲載したため、サフィ第2地区警察により逮捕された。

(2) ISIL支持者の窃盗集団の逮捕 (フェズ, エル・ジャディーダ, ブニ・ドラール)

(ア) 20日、DGSNは中央司法捜査局 (BCIJ) と連携し、ISILを支持するリーダーが率いる7名からなる窃盗集団を逮捕した。この窃盗集団は、フェズ, エル・ジャディーダ, ブニ・ドラール (ウジュダ近郊) で活動していた。この捜査によりこの窃盗集団のISIL支持者のリーダーを逮捕するとともに、同者の3人の息子及び妻が滞在するシリア・イラクのISILに参加する計画を頓挫させた。同者は犯罪行為で得た資金を渡航費用に充てようとしていた。

(イ) 19日にこの窃盗集団がスバア・アユン (メクネス近郊) 近郊で家畜の群れを窃盗した後に捜査が開始され、同者らが盗難物品を隠匿していたフェズの隠れ家を検索し

た際、刃物、自動車1台、犯罪行為に使用される疑わしい装備品及び物体が押収された。

(3) 7名からなるテロ細胞の解体（エル・ジャディーダ、サレ、エル・ガラ、ブラアワンヌ及びマアタツラ）

(ア) 27日、中央司法捜査局（BCIJ）は、ハイ・アッサファ（エル・ジャディーダ市内）、サレ（ラバト近隣）、エル・ガラ（セタット近郊）、ブラアワンヌ（エル・ジャディーダ県）及びマアタツラ（タザ県）で活動していたテロ細胞を解体し、7名を逮捕、ISILの危険なテロ計画を阻止した。また、今次オペレーションはハムーシ国家安全総局（DGSN）総局長兼国土監視総局（DGST）総局長の指揮の下、実施された。同総局長は、26日からエル・ジャディーダの指揮所に詰め、本オペレーションの指揮を執っていた。

(イ) このオペレーションはモロッコの安定及び安全を標的としたテロの脅威に対する警戒監視の枠組みの中で行われ、エル・ジャディーダのこのテロ細胞の中核によって整備された隠れ家を発見した。この細胞は、イラク・シリア及びリビアで活動するISIL指導者に扇動され、モロッコを狙ったテロ計画を準備していた。

(ウ) このオペレーションにより、夜間赤外照準器付短銃1丁と拳銃7丁を含む火器、大量の弾薬、大型ナイフ4本、通信機器2台、戦闘用迷彩ズボン数本、伸縮式棒数本、化学装備品及び物質、爆発物の製造に使用され得る液体、自爆ベルトを備えたベストが押収された。これらの押収物は、検査のために警察の科学技術研究所で分析されることとなる。

(エ) また、このテロ細胞のメンバーはより多くの若者のリクルートを計画するとともに、モロッコの安定を侵害し、国民に恐怖を拡散するために、最大限の犠牲者が発生するような破壊的なオペレーションをそれらの者に実行させることを計画していた。

(オ) 更に、このテロ細胞の解体は、最近様々な国を狙ったISILのテロと、ISILモロッコ人戦闘員がメディア・キャンペーンを通じて行う脅威が増加する中で行われた。この中でモロッコ人戦闘員はISILの一つの「州（wilaya）」を設立するためにモロッコで同様のテロを実施する決意を表明している。

(カ) このオペレーションに関し、一部メディアはエル・ジャディーダにおける治安部隊とテロ細胞の銃撃戦を報じていたが、内務省声明によれば、これは突入の際の威嚇射撃であったとのことである。

(キ) また、エル・ジャディーダのこの隠れ家には昨年11月頃から1名の未成年者を含む3名の者が住みついており、目立たない生活をし、隣人付き合いもあまりなく、過激主義の兆候を見せていなかったとする報道もある。

(ク) その後の捜査で、この細胞のリーダーはフェイスブックなどSNSで活発な活動を行っていた人物であったことが判明した。このテロ細胞のメンバーの多くは、ウエド・アムリル、ブラワンヌ、マルティル、サレ出身である。メンバーの年齢は20歳から29歳である。

(ケ) この細胞のリーダーは I S I L に忠誠を誓っており、当初、シリア・イラクの指導者と直接接触を図ろうと試みたが、失敗した。次いで、アルジェリアのテロ・グループ「ジュンド・アル・キラファ」内のイスラム教に改宗したメンバーと連絡を取り、同者がこのリーダーに対し、モロッコでテロを実行し、ジハードを実践するよう提案した。このリーダーはシリア・イラク乃至モロッコで自殺する準備ができている旨述べており、自爆テロを実施する決意を固めていた。また、このテロ細胞のリーダーは、I S I L のあるモロッコ人指導者と連絡を取り、この指導者は、このリーダーにモロッコでのテロを準備するよう命じ、ロジや武器の支援を約束した。

(コ) このテロ細胞から押収された武器はおそらくリビアから流入したもので、アルジェリアを経由してモロッコに持ち込まれたとされ、これらの武器は、シリア・イラクやリビアで活動する I S I L との連携により、モロッコに持ち込まれたことが判明している。

(サ) このテロ細胞は、モロッコの政府の重要人物、外交団や観光施設を標的としており、テロ計画はモロッコに恐怖を拡散し、モロッコの治安体制における市民の信頼に危害をもたらすことを企図していた。

<外交・国際関係>

1 我が国との関係

● 伊達参議院議長のモロッコ訪問

(1) 11日から13日まで、伊達忠一参議院議長は、吉田博美参議院議員、小川敏夫参議院議員、魚住裕一郎参議院議員、井上哲士参議院議員、儀間光男参議院議員と共に、モロッコを公式訪問した。

(2) 12日にはエル・アンサリ参議院第1副議長と会談し、約30分にわたり両議会館及び二国間関係を更に強化する方法について議論した。伊達議長率いる参議院議員団は、モハメッド5世霊廟で献花を行ったほか、エル・アンサリ第1副議長主催夕食会に出席した。

2 アフリカ関係

(1) メズアール外務・協力大臣のセネガル・コートジボワール・ブルキナファソ訪問

(ア) 24日、メズアール外務・協力大臣はブルキナファソにおいて、モロッコが23日、AU本部にてAU制定法の締結文書を寄託したと認めた。メズアール大臣はAUサミットの準備のための最後の各国訪問を行っており、各地元メディアが発表した情報によれば、ダカール、アビジャン及びワガドゥグを訪問した。

(イ) セネガル、コートジボワール、ブルキナファソ及び他のアフリカ諸国において、同大臣はそれぞれの国の国家元首に対して、モハメッド6世国王の口頭のメッセージを伝達した。

(ウ) 同大臣は、ブルキナファソで行われた記者会見で、「これは、第28回AUサミットにおけるモロッコのAU加盟の問題を提起する機会であった。自分はカボレ大統領に対して、今日まで行われたプロセスを説明した。加盟にかかる文書の提出から、無条件・留保なしのモロッコ国会によるAU制定法の締結まで全ての手続は完了している。また、昨日、AU委員会に対して寄託書を提出した。アフリカ統一機構の創設国であるモロッコは、これまでもアフリカ解放運動、アフリカ諸国及びアフリカの民衆の側にいたが、これまでと同様にその戦いを継続するということを当然主張した」と明確に述べた。

(3) モロッコのAU加盟の決定

30日にアディスアベバで行われたAU総会でモロッコのAU加盟が認められた。同総会では10か国のAU加盟国がモロッコの加盟に留保を付したとされ、ムガベ大統領のイニシアティブにより、AU制定法の観点からモロッコの加盟を検討する委員会の設置が提案された一方、39か国が無条件でモロッコのAU加盟への賛成を表明した。少数の国が大多数の国の決定をブロックすることができるのかという点が議論された結果、コンデAU議長は、南アが意思決定における民主主義の重要性にかかる発言を行った後、コンセンサスを得たとして、モロッコのAU加盟を決定した。なお、サハラ・ア

ラブ民主共和国（SADR/RASD）の代表は、モロッコのAU復帰に対する反対を表明した後に、抗議のために退席した。

（４）モロッコのAU加盟の決定に関するモロッコ外務・協力省コミュニケの発出

30日、モロッコ外務・協力省は、モロッコのAU加盟の決定にかかる概要以下のコミュニケを発出した。

（ア）30日、第28回AU総会は、大部分のアフリカ諸国からの支持を受け、モロッコのAU加盟の承認を発表した。

（イ）AUC委員長によれば、39か国がモロッコのAU復帰に賛意を示したとされる。この復帰は、モハメッド6世国王による進取気鋭かつ一貫した政策、及び南南協力推進とウィン・ウィンの協力のための国王のヴィジョンによるものであり、これは最も重要な国家の正義（注：モロッコの領土の一体性を指すものとみられる）を保護する目的のために行われた。

（ウ）モロッコのアフリカにおける定着のための国王の取組は、国家の活力を総動員しつつ、とりわけ国王のアフリカ諸国歴訪を通じて行われたが、これら訪問はアフリカ大陸のための連帯と協力の原則のためのものである。

（エ）モロッコのAU復帰の意思は、キガリで行われた第27回AU総会における国王のメッセージにより表明されたが、国王は其中で、モロッコがその家族における当然の地位を回復する時が来たと述べていた。

（オ）国王はまたこのメッセージの中で、「この復帰によって、モロッコはアフリカのための取組を継続することができ、モロッコにかかる全ての問題における関わりを強化することができる。モロッコはこうして、建設的な方法でAUのアジェンダ及び活動に貢献することを約束する」と強調した。

（カ）なお、27日から国王はモロッコのAU復帰のためにエチオピアを訪問している。この訪問の中で、国王は複数のアフリカ元首と会談を持ち（注：他の外務・協力省コミュニケによれば、コンデ・ギニア大統領、カガメ・ルワンダ大統領、ンゲソ・コンゴ共大統領、ンゲマ赤道ギニア大統領と会談し、ムスワティ3世スワジランド国王からの親書を受け取るため、在エチオピア同国大使の表敬を受けた）、国家元首及び政府代表のためにレセプションを開催した。

（５）AU総会におけるモハメッド6世国王演説

31日にアディスアベバで行われたAU総会において、モハメッド6世国王が行った演説の概要以下のとおり。

（ア）モロッコが受けた率直かつ大量の支持が、我々を結びつける関係の強さを表している。OAUからの脱退は必要であった。脱退はアフリカ大陸におけるモロッコの行動を再結集させると同時に、アフリカが如何にモロッコにとって欠くことのできない存在であるかを明白にするとともに、モロッコがアフリカにとって欠くことのできない存在であるかを明白にした。我々はそれについて慎重に熟考し、それが今、明らかかなものと

なった。

(イ) 家に帰るときが来た。モロッコが最も発展したアフリカ諸国の一つとなり、大部分の加盟国が我々の復帰を切望している今、我々は家族の元に帰ることを選択した。我々が実際には別れなかった家族。我々はA U諸機関を不在にしていたが、我々の結びつきは決して途絶えることなく、力強いまま残っていた。アフリカの兄弟諸国はいつも我々を頼りにすることができた。

(ウ) 強い二国間関係はこうして明快に発展していった。2000年以来、モロッコは協力にかかる様々な分野でアフリカ諸国と1000近い協定を締結した。1956年から1999年までの間、515の協定が署名されたが、2000年以降949の協定を署名した。これはほとんど倍増である。

(エ) 私はこれらの行動に具体的な推進力を与えることを希望し、アフリカを訪問した。46回の訪問の中で25のアフリカ諸国を訪れ、官民の分野で多数の協定が署名された。

(オ) 我々の行動は特に訓練の分野に注力しており、これはアフリカの兄弟国との協力関係の中心を占めている。アフリカの住民は、多くの奨学金のおかげでモロッコで高度な訓練を受けることができている。

(カ) また、私がこれらの国々を訪問した際、戦略的な大規模プロジェクトが着手された。第1に、私はブハリ・ナイジェリア大統領と共に、大西洋アフリカ・ガス・パイプライン・プロジェクトを開始することができた。このプロジェクトにより産出国から欧州に向けたガスの輸送が可能となるだけでなく、全ての西アフリカ諸国に裨益するものである。このプロジェクトは実際、一つの地域的な電力市場の形成に貢献し、産業開発、経済競争力の改善、社会開発の加速化のためにかなりのエネルギー源を供給するであろう。このプロジェクトは決定的な推進力を創造し、同時並行的なプロジェクトの創出と発展をもたらすことにより、沿岸国とその住民のために富を創造するであろう。更に、このプロジェクトはより平穏な二国間・多数国間関係を構築させ、開発と成長に好都合な環境を生み出すこととなる。

(キ) 第2に、農業生産性を改善し、食料安全保障と村落開発を促進するプロジェクトの枠組みで、エチオピアとナイジェリアに肥料製造ユニットが設置された。このプロジェクトの利益はアフリカ大陸全体に広がるであろう。我々は、基礎的な食料の需要を満足させるものが天然ガスでも石油でもないことを知っている。アフリカの大きな挑戦は食料安全保障ではないのか。これは、我々がCOP22で約束した「トリプルAイニシアティブ」と言われる気候変動におけるアフリカ農業適応イニシアティブの流れである。このイニシアティブは、気候変動による共通の挑戦に対する画期的かつ非常に具体的な対応である。このイニシアティブはその発表以降、既に約30の国によって適用されている。「トリプルAイニシアティブ」は、アフリカの小規模農業のために重要な資金を集めることを目的としており、土壌の合理的な管理、農業用水の持続可能な制御、気候リスクの管理及びプロジェクトの小規模実施者の団結した財政支援といった4つのプ

プログラムを支援することにより、農業プロジェクトの構造化・加速化をもたらすであろう。このイニシアティブは、昨年11月にマラケシュで私自身が議長を務めたアフリカ行動サミットの重要軸の一つであった。

(ク) 更に、我々の結びつきは安全と平和の分野でも同様に強固なまま保たれている。アフリカの安定を守る必要があった際、我々が常にそこにいたことを想起する必要があるであろうか。モロッコはその独立以来、アフリカにおいて6つの国連PKO活動に参加し、様々なオペレーションに数千人を派遣した。モロッコの部隊は現在でも中央アフリカとコンゴ（民）で展開している。モロッコは同様に、とりわけリビアやマノ川地域において平和を前進させるために仲裁を行った。

(ケ) 南南協力にかかる私のヴィジョンは明白で確固としている。我が国は見せびらかすことなく、持っているものを共有する。賢明な協力の枠組みで、モロッコは、アフリカで最重要な経済主体として、共通の発展のエンジンとなるであろう。我が国はサブサハラ・アフリカ人を受け入れており（注：難民・移民の受入れを指す）、複数の（難民受入れ）正規化オペレーションが着手され、第1フェーズとして2万5千人以上の人々がこれを享受した。第2フェーズも同様の連帯と人道主義の精神で数週間前から成功裏に開始されたが、我々はこれらの行動を誇らしく思っている。これらの行動は、あまりに長い間非合法性に苦しんだこれらの人々のために必要不可欠であった。我々は、これらの人々が周辺部で、雇用、保健、住居や教育へのアクセスもない状態で生活することのないよう行動する。我々は、カップルとりわけモロッコ人とサブサハラ・アフリカ人で構成される混合カップルが別れ離れにならないよう行動する。移民に対するこれら全ての建設的な行動はモロッコのイメージを強固にし、我々が既に構築した結びつきを強化した。ある者は、この取組によりモロッコはアフリカにおけるリーダーシップの獲得を目指すであろうと主張する。私はそれに対して、モロッコがリーダーシップを委ねようと努めているのはアフリカであると返答する。

(コ) 我々は、この誇り高い議会において我々が全会一致していないということを忘れてはならない。不毛な議論を呼び起こす考えを我々から遠ざけなければならない。ある者がほのめかすようには、我々は分裂することを全く望まない。モロッコは効果的な方法で（AUに）参加し、その活動アジェンダに貢献した後すぐに、その行動を結集させ、積極的に出るであろう。我々はこの美しい汎アフリカ建設の創設に参加した。我々は当然のこととして、そこに我々の居場所を再度見つけることを望む。

(サ) モロッコは天然資源を有さないが、ここ数十年で新興国となった。モロッコは今日、アフリカで最も繁栄する国家の一つである。モロッコは、マグレブ地域の統合に注力する必要があると常に考えてきた。共通の利益を信じる力が消えたために、マグレブ・アラブ連合（AMU/UMA）の灯火は消えている。1950年代のパイオニア世代によって推進されたマグレブの理想の高揚は裏切られている。残念ながら、今日、UMAはアフリカ大陸もしくは世界において最も統合されていない地域であると言わざ

るを得ない。ECOWAS諸国間の地域内貿易が10%に上昇し、SADC諸国間でも19%に上昇している一方、マグレブ諸国間の貿易は3%以下に留まっている。同様に、東アフリカ経済共同体が野心的な統合プロジェクトを進め、ECOWASも人・モノ・資本の移動の自由にかかる信頼度の高いスペースを提供しているにもかかわらず、マグレブ諸国は非常に弱い経済協力の水準にある。我がマグレブの同胞市民はこの事態を理解できない。近隣アフリカ諸地域を模範とするかもしれないものの、もし我々が行動しない場合には、UMAは、28年前にUMAを誕生させたマラケシュ協定の野心に合致することのできない慢性的な無能力の中で解体するであろう。

(シ) この総括はモロッコのアフリカの選択においてモロッコを強固にするものである。我が国はそのノウハウの共有・移転を選択する。モロッコは、連帯し、かつ確かな未来を具体的に築くことを提案する。我々は誇りを持って、歴史が我々の主張を認めていることを記録する。モロッコは裏口からAUに戻るのではなく、正当な手段でAUに復帰する。我々のアフリカの兄弟が今日、我々に施した温かい歓迎がその証拠である。我々は歓喜を持って、アフリカ各国に対し、我が国のダイナミズムと協力し、我が大陸全土に新しい勢いを与えるよう求める。

(ス) 我々は、数十年に亘り略奪の被害を被った後、我々の土地が繁栄の時を迎えるよう尽力しなければならない。植民地主義がアフリカの諸問題の唯一の原因ではないが、その有害な効果は永続する。長い間、我々は決定や取組を行う際にそのまなごしを他に向けてきた。この反射運動を止める時ではないのか。我々の大陸の方に我々自身を向ける時ではないのか。その文化的な富やその人間的な潜在力を考慮する時ではないのか。アフリカはその資源、その文化的遺産、その精神的な価値を誇ることができる。そして、未来はこの自然な誇りを高く、強く高めるに違いない。アフリカは、選挙にかかる係争や請願を解決するために、憲法評議会や上級裁判所などの調整装置や司法機関を有している。これらの機関は必要に応じて強化され得るが、既に存在している。これらの機関は活用されている。そうでなければ、これらの機関は何のために存在するのか。

(セ) アフリカは今日、コンプレックスのない新しいリーダーの世代により率いられている。彼らは、安定、政治的解放、その住民の経済発展と社会的向上のために尽力している。彼らは、西洋によって採点されたり、評価されることを恐れることなく、決意、毅然さ及び確信を持って行動している。近年、北側諸国の成長率はアフリカ諸国の成長率を上回っていない。彼らの破綻的な(世論)調査は、彼らとその国民の切望を理解する全能力を失ったことを明らかにしている。それでもなお、衰えた社会・経済状態や弱体化したリーダーシップに直面するこれらの国は、我々に対し、彼らの成長モデルを指図する権利を詐称している。私は繰り返す。第三世界主義の観念は私には時代遅れのものに見える。これらの策略は、むしろ経済的な機会主義から生じている。一つの国に与えられる敬意や好意は、その天然資源やそこから得られる利益にもはや依拠するべきではない。

(ソ) 我が国が選んだのは連帯、平和及び団結の道である。我々は、アフリカ市民の発展と繁栄のための我々の取組を再確認する。我々アフリカ市民は方法と才能を持っている。我々は共に我々の国民の切望を実現することができる。

3 欧州関係

● モロッコ・英国間の治安協力の強化

(ア) 19日、ラバトにてシェルキ・ドライス内務大臣付特命大臣は、モロッコ・英国間の治安協力について、ベン・ウォーレス英国治安担当大臣と会談した。両大臣は会談で、両国の素晴らしい二国間関係は、モハメッド6世国王とエリザベス2世英国女王の関係の恩恵による旨強調した。

(イ) この会談はモロッコ・英国間の共通の関心事項、とりわけ対テロ、組織犯罪及びサイバー犯罪における二国間協力の方法の向上に焦点が置かれるとともに、及び運用レベルでの治安協力の強化や情報交換も協議された。

(ウ) ウォーレス英国治安担当大臣は、グローバル・テロ対策フォーラム（GCTF）を通じたモロッコの対テロ・メカニズムの強化及びテロの脅威の増加に対する積極的な貢献に対し敬意を表するとともに、英国人観光客の治安と安全を保証するためモロッコ当局により実施されている対策を称賛した。

(オ) 他方、ドライス内務大臣付特命大臣は、モハメッド6世国王の命令により、モロッコはモロッコ国民及びモロッコの外国人の治安を保証するため、常に努力している旨述べた。

(カ) 両大臣は会談後、モロッコ・英国間の治安協力を更に発展させるために緊密に連携していく旨表明した。これは二国間のみならず、他の欧州諸国と同じレベルまで英・モロッコ間の協力を高めるために地域・マルチの協力が含まれる。

4 トルコ関係

● ギュレン関連教育施設の閉鎖

(1) 5日、内務省は、フェトゥフッラー・ギュレンに関する「モハメド・アル・ファティハ (Mohamed Al-Fatih)」グループの全ての在モロッコ教育施設が、ギュレン運動の思想を伝播し、モロッコの教育・宗教システムの原則に反する思想を普及したとして、同日から閉鎖されることを発表した。

(2) 内務省は、国民教育・職業訓練省がこれらの施設に対してシステムを改善し、適法な司法措置とカリキュラムに従うよう複数の改善命令を発出したが、これらの施設は従わなかったとして、これらの施設の閉鎖が決定されたとしている。国民教育・職業訓練省は、これらの施設に通う児童が他の教育施設に通えるよう尽力するとしている。

＜モロッコ要人の外国訪問＞

日付	国	氏名・肩書き	目的
1月7日	ガーナ	メズアール外務・協力大臣	アクフォ＝アド大統領就任式典出席
1月9-13日	チリ	ベンチャマシュ参議院議長	公式訪問，オスヴァルド・アンドラーデ衆議院議長との会談，ムニョス外務大臣との会談，レボレド・エネルギー大臣との会談，アントニオ・ゴメス国防大臣との会談
1月10日	ポルトガル	ムーレイ・ラシッド王子	マリオ・ソアレス元大統領葬儀出席
1月13-14日	マリ	メズアール外務・協力大臣	第27回仏・アフリカ・サミット出席
1月15日	仏	メズアール外務・協力大臣	仏主催中東和平に関する閣僚級会合出席
1月18-19日	ニジェール	ハッサド内務大臣	サヘル・アラブ諸国国家共同体（CEN-SAD）内務大臣会合出席，イスフ・マハマドゥ大統領表敬
1月20日	コートジボワール	メズアール外務・協力大臣，マンスーリ調査分析総局（DGED）総局長	ワタラ大統領表敬
1月24日	ブルキナファソ	メズアール外務・協力大臣，マンスーリ調査分析総局（DGED）総局長	政府高官との会談
1月27日-	エチオピア	モハメッド6世国王，ムーレイ・イスマイル王子エル・ヒンマ国王顧問，メズアール外務・協力大臣，ブリタ外務・協力大臣付特命大臣，マンスーリ DGED 総局長ほか	第28回 AU 総会出席，コンデ・ギニア大統領との会談，カガメ・ルワンダ大統領との会談，ンゲソ・コンゴ共大統領との会談，ンゲマ赤道ギニア大統領との会談，在エチオピア・スワジランド大使謁見（ムスワティ3世

			スワジランド国王からのメッセージ伝達)
--	--	--	---------------------

<外国要人のモロッコ訪問>

日付	国・機関	名・肩書き等	目的
1月3日	コモロ	サイド・イブラヒム法務・イスラム関係・行政・人権大臣	メズアール外務・協力大臣との会談
1月3日	ボツワナ	ベンソン＝モイトイ外務・国際協力大臣	メズアール外務・協力大臣との会談
1月6日	ヨルダン	ジュデ副首相兼外務大臣	モハメッド 6 世国王表敬, アブドッラー2 世国王親書の伝達
1月8-11日	ジブチ	ザカリヤ・シェイク・イブラヒム統合参謀総長(少将)	ブシャイブ・アルーブ王立軍総監(中将)との会談
1月11-13日	日本	伊達忠一参議院議長, 吉田博美参議院議員, 小川敏夫参議院議員, 魚住裕一郎参議院議員, 井上哲士参議院議員, 儀間光男参議院議員	公式訪問, エル・アンサリ参議院第1副議長との会談
1月19日	英国	ベン・ウォーレス治安担当大臣	ドライス内務大臣付特命大臣との会談

(了)